

生き続ける『源氏物語』よみがえる紫式部

—令和時代の古典の楽しみ方—

福田 智子

同志社大学文化情報学部教授

同志社大学人文科学研究所第 20 期第 3 研究代表

『源氏物語』といえば、学校の古文の時間で「もう結構！」という方がいる一方で、カルチャーセンターの「源氏物語講座」は満員御礼。『源氏物語』が私たちから敬遠されたり、私たちを魅了したりする理由は、いったいどこにあるのでしょうか。

『源氏物語』は、「物語」として読まれ、伝えられてきたのはもちろんのこと、華道や香道など芸道文化の中にも生き続けていました。そして、現代においても、平安朝という時代に、紫式部が『源氏物語』の中で描きたかったものはいったい何だったのか、興味が尽きることはありません。

この度の公開講演会では、『源氏物語』を素材とする「源氏流いけばな」を発掘された岩坪健氏、『源氏千種香』所載の江戸期の組香を現代の香席で復活させた矢野環氏、そして、紫式部の『源氏物語』に掛けた「思い」を『新・紫式部日記』（令和元年度、第 11 回日経小説大賞受賞作品）で現代によみがえらせた夏山かほる氏を迎え、『源氏物語』とその作者の魅力に迫ります。

また、これらの講師陣に竹田正幸氏（情報科学）を加えたパネルディスカッションでは、『新・紫式部日記』執筆秘話から、古典の新たな読みの可能性を追究して行きます。

なお、産学連携活動のひとつとして、(株)富士ゼロックス京都から「京都発 クラウド文化財アーカイブス」の御報告もあわせて行います。